

令和4年度 保護林モニタリング調査結果一覧

資料1

1 モニタリング調査の結果、影響が確認できた保護林（モニタリング実施間隔：5年）

番号	計画区	保護林区 分・番号	保護林名称	面積(ha)	確認出来た影響	評 価	管理方針書への反映 (モニタリングの実施間隔及び留意事項)	要領第5-2: 5年の要素 (R4調査)
1	八溝多賀	希少 個体 群保 護林	15 小川ブナ希少個体群保護林	103.51	カ その他	・ブナやミズナラ、コナラ及びシラカンバに鳥獣害や病虫害は確認されず、概ね健全に生育していた。 ・096-1について、シラカンバの生育本数が4本から3本に減少しており、シラカンバの保護林としては衰退しつつある。林床にササ類が多く繁茂していることもあり、シラカンバやシラカンバ以外の樹種についても低木や実生が見られない状況であった。 ・植被率の変化 【043-1〔継続〕】2017年：低木層50%、草本層70%→2022年：低木層10～25%、草本層35～70% 【043-2〔継続〕】森林生態系多様性基礎調査ID:9081501】2017年：低木層40%、草本層80%→2022年：低木層10～20%、草本層0～40% 【095-1〔継続〕】2017年：低木層60%、草本層80%→2022年：低木層20～40%、草本層65～75% 【096-1〔継続〕】2017年：低木層60%、草本層100%→2022年：低木層100%、草本層1%	・確認できた影響：[カ]その他：シカ侵入の影響(調査間隔は5年) ・保護対象種のシラカンバが衰退傾向にある096-1について、シラカンバ成木の生育状況に留意しながら、モニタリング調査を継続していく必要がある。 ・当保護林周辺の地域はニホンジカ生息分布のフロントラインといわれているため、ニホンジカによる影響に留意する。	キ
2	八溝多賀	希少 個体 群保 護林	20 ヤミゾサン ハ溝山ツガ・ダケカンバ希少個体群保護林	29.49	カ その他	・冷温帯性林を構成するブナやミズナラに鳥獣害や病虫害は確認されていないが、老齢で樹勢が衰退傾向にある立木が多い。 ・次世代を担う実生や稚樹が確認されなかった。 ・植被率の変化 【102-1〔継続〕】森林生態系多様性基礎調査ID:9081502】2017年：低木層10%、草本層100%→2022年：低木層0～10%、草本層100% 【102-2〔継続〕】2017年：低木層10%、草本層100%→2022年：低木層100%、草本層0%	・確認できた影響：[カ]その他：シカ侵入の影響(調査間隔は5年) ・林分を構成する主要な樹種が老齢で衰退傾向にあり、実生や稚樹が確認されていないため、今後の生育状況に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。 ・当保護林周辺の地域はニホンジカ生息分布のフロントラインといわれているため、ニホンジカによる影響に留意する。	キ
3	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	23 オガシロシツケン 小田代湿原希少個体群保護林	69.28	カ その他	・湿原構成種の出現数や被度群度が前回調査よりも減少し、また、低木が成長しており、乾燥化の傾向がみられた(調査範囲が木道沿いのためと考えられる)。 ・林内部の調査プロットについては、過年度の調査写真と比較して、ササ丈が高くなっており、分布範囲も増加している。保護林範囲がシカ防護柵に覆われているため、柵の効果によりニホンジカによる被害を防止できている影響と考える。	・確認できた影響：[カ]その他：湿原植生のため(調査間隔は5年) ・調査範囲が木道沿いのため乾燥化が進行していると考えられるが、湿原全体の状況を把握するためのモニタリング調査についても検討し、実施する必要があると考える。 ・引き続き、調査時期を過年度調査と合わせてモニタリング調査を継続していく。	キ
4	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	24 カラサワ 唐沢コメツガ希少個体群保護林	57.08	ア 野生鳥獣	・保護対象種のコメツガ及びシロヤシオ等はシカ防護ネットにより単木防護されているので、ニホンジカによる被害は受けておらず健全に生育していた。 ・ニホンジカによる採食圧が強く、ニッコウザサ以外の林床植生は数cmの高さになっており、確認できたのは僅かであった。 ・植被率の変化 【067-1〔継続〕】2017年：低木層40%、草本層90%→2022年：低木層10～30%、草本層85～90% 【067-2〔継続〕】2017年：低木層20%、草本層90%→2022年：低木層0～35%、草本層85～95%	・確認できた影響：[ア]野生鳥獣：ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、防護ネットによる対策がされていない立木への被害や林床植生の植被率の減少が危惧されることから、今後もニホンジカによる影響に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ
5	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	28 コウトク 光徳ミズナラ希少個体群保護林	24.28	ア 野生鳥獣	・ニホンジカによる食害の影響により、低木層を著しく欠いている。 ・保護対象種であるミズナラの大径木については健全に生育しているが、次世代を担う実生や稚樹の生育はほとんど確認されなかった。 ・植被率の変化 【072-1〔継続〕】森林生態系多様性基礎調査ID:9091505】2017年：低木層20%、草本層95%→2022年：低木層0～10%、草本層80% 【072-2〔継続〕】森林生態系多様性基礎調査ID:9091503】2017年：低木層0%、草本層95%→2022年：低木層0%、草本層60～80%	・確認できた影響：[ア]野生鳥獣：ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、防護ネットによる対策がされていない立木への被害や林床植生の植被率の減少が危惧されることから、今後もニホンジカによる影響に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ

番号	計画区	保護林区 分・番号	保護林名称	面積(ha)	確認出来た影響	評 価	管理方針書への反映 (モニタリングの実施間隔及び留意事項)	要領第5-2: 5年の要素 (R4調査)	
6	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	30 センジュ ハラ 千手ヶ原ミズナラ・ハルニレ希少個体群 保護林	98.95	ア	野生鳥獣	027-1:プロット内に保護対象種のドロノキが1本生育している。シカの痕跡は顕著には見られない。遷移が進むにつれて、ドロノキはなくなってしまふ。 029-1:シカ防護柵外に設置されているプロット。ヤチダモの実生は見られない。継続的にシカによる食害の影響がみられ、忌避植物であるシロヨメナが繁茂している。高さ10cmくらいの分布は、シカの採食圧が強いものの、日当たりや水分状況が良好なため、植生の出現種数は多い。 029-2:シカ防護柵内に設置されているプロット。ヤチダモの実生が確認された。柵外のプロットと比べて低木層の本木植物は生育しているが、ヤチダモの実生は少数。プロット内及び周辺の柵内にシカが侵入した形跡は見られない。 077-2:保護対象種のミズナラ及びハルニレの実生は各1個体ずつ生育していた。プロット内にシカの糞や休んだ跡が確認され、調査中にクマを目撃した。プロット周辺のカツラにクマの樹皮剥ぎ痕が多く見られた。成熟林。077-1は老齢林。 ・植被率の変化 【027-1〔継続〕】2017年:低木層0%、草本層90%→2022年:低木層0%、草本層50~80% 【029-1〔継続〕】2017年:低木層0%、草本層100%→2022年:低木層5~30%、草本層90~95% 【029-2〔継続〕】2017年:低木層10%、草本層100%→2022年:低木層5~35%、草本層85~90% 【077-2〔継続〕】2017年:低木層10%、草本層100%→2022年:低木層0%、草本層95%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・シカ防護柵内に設置されている029-2以外のプロットについては、継続的にシカによる食害の影響が見られ、林床には忌避植物であるシロヨメナが繁茂している状況であった。 ・保護対象種及び次世代を担う保護対象種の稚樹や実生の生育状況については、保護対象種の大径木については概ね健全に生育していたが、次世代を担う稚樹や実生についてはシカ柵内のプロット(029-2)内で僅かに確認できた程度であった。 ・森林管理署への聞き取り調査では、防鹿柵の改修を順次行わなければ、保護林内の植生や更新木が衰退される状況であるが、課題点として対策の遅れが挙げられている。	オ
7	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	31 センジュウガハラツツケン 戦場ヶ原湿原希少個体群保護林	174.68	カ	その他	・湿原内の構成種や被度群度について大きな変化は見られず、外来種等の侵入や乾燥化の影響も見られないことから、概ね良好な状態で維持されていると評価される。	・確認できた影響:[カ]その他:湿原植生のため(調査間隔は5年) ・湿原全体の状況を把握するためのモニタリング調査についても実施し、次回調査時も調査時期を合わせて植物種の組成や被度群度の変化に留意しながら調査を継続していく必要がある。	キ
8	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	32 タカハラヤマ 高原山イラモミ希少個体群保護林	90.89	ア	野生鳥獣	・次世代を担うイラモミの実生は僅かに確認されたが、シカの採食圧が強く、林床植生はほとんどみられなかった。 ・前回調査時に、シカ被害等により枯損していた立木については、今回調査では倒木しているものもみられ、新たな剥皮害も確認された。 ・植被率の変化 【065-1〔継続〕】2017年:低木層0%、草本層60%→2022年:低木層0%、草本層3% 【065-2〔継続〕】2017年:低木層0%、草本層30%→2022年:低木層0%、草本層0~5%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、林床植生の生育が僅かであった。ニホンジカによる被害を継続的に受けている状況のため、防護対策の検討をするとともに、今後の保護林の状況に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ
9	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	33 チャノキダイラ 茶ノ木平ウラジロモミ希少個体群保 護林	81.43	ア	野生鳥獣	・次世代を担うウラジロモミの実生は僅かに確認されたが、林床植生へのニホンジカによる被害が著しい。 ・前回調査時に、シカ被害等により枯損していた立木については、今回調査では倒木しているものもみられ、新たな剥皮害も確認された。 ・植被率の変化 【069-1〔継続〕】2017年:低木層40%、草本層85%→2022年:低木層0~15%、草本層30~65% 【069-2〔継続〕】2017年:低木層30%、草本層90%→2022年:低木層0~15%、草本層50~70%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、ニホンジカによる被害を継続的に受けている状況のため、防護対策の検討をするとともに、今後の保護林の状況に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ
10	鬼怒川	希少 個体 群保 護林	36 リュウス`タキ 竜頭の滝カラマツ遺伝資源希少個体群 保護林	12.98	ア	野生鳥獣	・ニホンジカによる林床植生への被害が著しく、次世代を担うカラマツは確認されなかったが、生育しているカラマツについては概ね健全に生育していた。 ・方形区の植生調査結果について、植被率に変化は見られないが、シロヨメナが占める割合が増えており、ニホンジカによる被害を継続的に受けていることがわかる。 ・植被率の変化 【026-1〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9091506】2017年:低木層20%、草本層75%→2022年:低木層0%、草本層50~80% 【H30方形〔継続〕】2018年:低木層65%、草本層2%→2022年:低木層65%、草本層2%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、林床植生の生育が僅かであった。ニホンジカによる被害を継続的に受けている状況のため、防護対策の検討をするとともに、今後の保護林の状況に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ
11	山梨東部	希少 個体 群保 護林	85 スフノモリ 諏訪森アカマツ希少個体群保護林	10.79	イ	病虫害	・保護対象種のアカマツは、マツ枯れ防止対策の樹幹注入が行われているものの、前回調査と比較して大きな変化は認められない。 ・植被率の変化 【113-1〔継続〕森林生態系基礎調査ID:9191501】2017年:低木層50%、草本層60%→2022年:低木層30~60%、草本層10~20% 【113-2〔継続〕森林生態系基礎調査ID:9191502】2017年:低木層60%、草本層60%→2022年:低木層10~30%、草本層10%	・確認できた影響:[イ]病虫害:マツ枯れ、ナラ枯れ(調査間隔は5年) ・次世代を担うアカマツの実生が確認されていないため、マツ枯れの被害状況も含め、今後の遷移の動態に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。 ・ナラ枯れ被害の発生にも留意する。	オ

番号	計画区	保護林区 分・番号	保護林名称	面積(ha)	確認出来た影響	評 価	管理方針書への反映 (モニタリングの実施間隔及び留意事項)	要領第5-2: 5年の要素 (R4調査)
12	天竜	希少 個体 群保 護林	67 イワタケヤマ 岩岳山アカヤシオ・シロヤシオ希少個 体群保護林	199.39	ア 野生鳥獣	・保護対象種のシロヤシオとアカヤシオについては健全に生育しているが、実生等が僅かしか確認されておらず、ニホンジカの影響により林床植生が乏しい状況であった。 ・植被率の変化 【142-1〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221526】2017年:低木層40%、草本層70%→2022年:低木層40~70%、草本層20~60% 【142-2〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221527】2017年:低木層60%、草本層30%→2022年:低木層0~10%、草本層20~40%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、ニホンジカによる被害を継続的に受けている状況のため、防護対策の検討をするとともに、今後の保護林の状況に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ
13	天竜	希少 個体 群保 護林	68 コガネ沢ブナ・イヌブナ遺伝資源希少 個体群保護林	28.21	ア 野生鳥獣	・植被率の変化 【051-1〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221522】2017年:低木層30%、草本層5% 【051-2〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221523】2017年:低木層30%、草本層10%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・今年度以降、通行状態が改善され次第、現地調査を実施する。資料調査や聞き取り調査を引き続き実施し、保護林の状況把握を継続する。 ・周辺の保護林と同じような状況と推測し、ニホンジカの影響等が懸念されるため、調査間隔は5年とした。	オ
14	天竜	希少 個体 群保 護林	69 カワカミ 川上ツガ・ハリモミ希少個体群保護林	54.03	ア 野生鳥獣	・保護対象種のツガ及びハリモミは概ね健全に生育していたが、林床植生にニホンジカの食害による影響が著しくみられ、保護対象種の稚樹や実生は確認されなかった。 ・植被率の変化 【141-1〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221524】2017年:低木層30%、草本層1% 【141-2〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221525】2017年:低木層50%、草本層40%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・今年度以降、調査間隔に従い、詳細調査を実施する。資料調査や聞き取り調査を引き続き実施し、保護林の状況把握を継続する。	オ
15	天竜	希少 個体 群保 護林	72 セシリ 瀬尻ホソバシクナゲ希少個体群保護 林	21.20	ア 野生鳥獣	・保護対象種であるホソバシクナゲについては概ね健全に生育しており、保護林内に実生等も確認した。 ・ニホンジカによる食害の影響により、下層植生に忌避植物とされるアセビやシキミ等が優占して生育していた。 ・植被率の変化 【144-1〔継続〕森林生態系多様性基礎調査ID:9221529】2017年:低木層10%、草本層20%→2022年:低木層10~40%、草本層10~20%	・確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカによる採食圧が強く、ニホンジカによる被害を継続的に受けている状況のため、防護対策の検討をするとともに、今後の保護林の状況に留意しながらモニタリング調査を継続していく必要がある。	オ
16	鬼怒川	緑の回廊	緑の回廊 日光線	12,122.39	ア 野生鳥獣	・今年度実施した森林概況調査では、前回調査時に引き続き、ニホンジカの影響による被害が確認され、林床植生も食害により乏しい状況にある。病虫害については確認されていない。 ・平成24年度に実施された緑の回廊モニタリング調査結果と比較して、大きな変化は見られず、草本層から低木層の植被率が低いことは依然変わっていない。	確認できた影響:[ア]野生鳥獣:ニホンジカ(調査間隔は5年) ・ニホンジカの影響に留意して、モニタリング調査を継続する。	オ
計			16 箇所	13,178.58				

【保護林への影響の種類】 (モニタリングマニュアル)

ア. 野生鳥獣 イ. 病虫害 ウ. 外来種 エ. 温暖化 オ. 自然攪乱 カ. その他 一. 影響なし

【モニタリング間隔 5年の基準】 (要領第5-2)

ア: 遷移の途中段階にある保護林
イ: 復元を行っている保護林
ウ: 保護対象の個体群の持続性に問題がある保護林
エ: 保護林外部からの影響を受けている保護林
オ: 鳥獣・病虫害被害及び移入種による影響が顕著にある保護林
カ: 温暖化による影響が顕著にある保護林
キ: その他、短期間で大きな変化が想定される保護林

令和4年度 保護林モニタリング調査箇所 (位置図)

別紙1-2

